

《ヒロシマのピエタ展》—その成果と課題

— 鍛田 徹 (広島芸術学会・広島大学)

ヒロシマに投下された原子爆弾はまさに究極的な生の否定であり、その後に作られた原爆に関わる文学や音楽、美術といった藝術は、それらを記録するか、向き合うか、あるいは乗り越えようとして生み出されてきたものである。それらはいわばダーク・サイドを出自とした藝術と言い換えることもできるであろうが、それらを生み出してきた“藝術の腐葉土”の質は時代と共に変化を余儀なくされている。

例えば、近年、広島では被爆者の高齢化によって記憶の風化が懸念される声が年々大きくなってきているが、実体験を持たないものが被爆者の声を継承していくには様々な課題があるように、藝術の世界にも同じ継承と発展の問題が横たわっている。そもそも作品の根幹をなす作家自身の思想やコンセプトは、物事に対する知識や理解、思考・態度等から生成されるものであり、それらは時代状況や時代の空気によって左右されたり、変質したりしているからだ。

これらに対して様々なアーティストの取り組みがあるが、その中に被爆建物を発表の場とする数多くの美術展の実践があり、それらは現代における藝術のあり方を考察する上で多くの示唆に富むものと言えるだろう。その活動の一例である《ヒロシマのピエタ展》は、原爆ドームに近接した広島市立本川小学校・平和資料館（被爆建物）を会場にしたサイト・スペシフィックな彫刻展であり、次世代の新たな試みとして注目された。

本展の企画意図は、それまで平和学習の場としてのみ利用されてきた被爆建物に美術作品を展示し、普段とは異なる特殊な場を生成させることであった。特に、人体を模した具象的な人物彫刻は、観る者に、自己と作品と建物の関係性を容易に解釈させうるものとなった。また、その人物彫刻のテーマが普遍的な「命」「生」「死」等であったことから、鑑賞者にとって原爆を前提としながらも、誰にとっても身近な人生や家族等といった側面が強調され、より身近なテーマとして受け止められたと言えるだろう。それは、本展の成果として、来場者のアンケートや、新聞、美術評論家等の展覧会評から裏付けることができる。

一方で、「被爆体験を持たない他者がどのような立ち位置で表現（継承）するか」、「場（ヒロシマ）への依存ではないのか」、「彫刻としての完結性と場との

関係性をどのように解決するのか」といった課題も残っている。

《ヒロシマのピエタ展》後の展開としては、個人的な体験から“喪失感”や“痕跡”をテーマにした作品制作や、大学病院における“癒し”をテーマにしたホスピタルアートの実践を行ってきたが、今後更なる研究の継続が必要であると認識している。